

新しい地誌学習—九州地方を例に

大分大学教育福祉科学部 永田忠道

1 地誌内容+地域研究=新しい地誌学習

いよいよ2012年度より、新しい地理学習が本格実施となる。まもなく姿を現す新たな地理教科書にも期待が高まっている。

地理の内容構成は、「(1) 世界と日本の地域構成、(2) 地域の規模に応じた調査、(3) 世界と比べて見た日本」の三項目構成から、「(1) 世界の様々な地域、(2) 日本の様々な地域」という二本柱の編成となる。

世界や日本の「大観」→世界や日本や身近な地域の「調査」→世界と日本の「比較」という研究手法を軸とした内容編成から、なじみ深い「世界」と「日本」の地誌内容に即した地理のカリキュラム構成が復活する。

1998年の学習指導要領で示された地理の姿はある意味、中学校社会科史上、最も斬新なものであった。ただし、世界や日本の地域を選択的・限定的に詳しく取り扱う地域研究スタイルの学習は、その本質がなかなか理解されないままに、今次の改訂において、地理の在り方は、表面的には再び伝統的なスタイルへと戻ったように受けとめられている。

しかし、このたびの新たな地理の内容構成をよく見てみると、実は伝統的な地誌内容スタイルと、前次の地域研究スタイルの有効な部分をうまく織り交ぜながら編成されていることに気づかされる。すなわち、地誌スタイルの有効性とは、なじみ深い世界や日本の諸

地域という地誌内容に即したカリキュラム編成を採用した点であり、地域研究スタイルのそれとは地域を網羅的ではなく焦点を絞って分析的に考察していこうとする手法である。この点を象徴的に表すキーワードが、今次の「動態地誌的な学習」である。

2 動態地誌的な学習と日本の諸地域

動態地誌的な学習とは、伝統的な地誌学習のように、世界や日本の諸地域について、どの地域を学習する際にも、同じような自然・人口・産業・・・等々といった静態的な項目に即した学習とは異なる。学習対象とする地域の特色ある事象を中核として、それを他の事象と有機的に関連づけ、地域的特色をとらえさせようとする学習、とされている。

そのため、これからの地理学習では、世界や日本の様々な地域を学習する際には、それぞれの学習対象地域ごとに、多様な学習が展開されることになる。

日本の諸地域の学習では、自然環境、歴史的背景、産業、環境問題や環境保全、人口や都市・村落、生活・文化、他地域との結びつき、という七つの観点に即した七つの地方の学習が再び展開されることになる。

平成24年度用『社会科 中学生の地理』（以下、新教科書）では、九州は自然環境、中国・四国は他地域との結びつき、近畿は環境問題や環境保全、中部は産業、関東は人口や都市・

村落、東北は生活・文化、北海道は歴史的背景を、それぞれの地方の視点として配置している。新教科書では、それぞれの視点を中核としながらも、他の事象も関連づけながら地域的な特色を追究する学習を展開できるような工夫が各所に施されている。ここでは、九州地方を例に、今後の地理学習のあり方を具体的に確認してみる。

3 自然環境と「共生」する九州地方の姿

自然環境を視点に設定した九州地方の学習は、標準的には5～6時間で単元を構成できるように、次のような項目構成となっている。

- ①九州地方はどのような地方だろうか
- ②火山のめぐみと防災への取り組み
- ③大陸に近い位置と関係する歴史と工業
- ④自然環境と農業のくふう
- ⑤沖縄の自然環境とくらしや産業
- *学習のまとめ

もちろん、九州地方は自然環境以外の視点でも、様々な学習を展開できる地域でもある。あえて新教科書で、九州に自然環境の視点を設定した理由としては、九州地方の人々による自然との「共生」のあり方を地理的に追究していくことが、この地方の地域的特色をとらえる本質であると考えたためである。

九州地方の冒頭であるp.166の地図と阿蘇山、万座ビーチの写真から、多くの火山から多くの島々までが存在する九州地方の多様な自然環境を感じた後に、次のp.167では「九州地方をみる手がかり」において、「なぜ2月に宮崎県や沖縄県で、プロ野球のキャンプが行われるのだろうか」との問いかけが用意されている。近年では、野球チームだけでなく、国内外からも各種のプロスポーツチームがキ

ャンプを行う理由を地理的に追究することを通して、比較的温暖な気候であるなど、九州地方を自然環境の視点を中心にみていくと、どのような地域といえるのか、についての考察を進めていく道筋が、ここでつくられる。

次のp.168では、温泉の湧出量が日本一である大分県の別府温泉や湯布院を取り上げな



「社会科 中学生の地理」 p.166～167



「社会科 中学生の地理」 p.168～169



「社会科 中学生の地理」 p.170～171

がら、九州地方の自然がもたらす豊かな恵みを確認しつつも、p.169では長崎県の雲仙岳や鹿児島県の桜島を事例に、自然の厳しさへの人々の向き合い方についても、深く考えさせる手立てが設定されている。

p.170~171では、古くから九州地方の中心地であった福岡市や北九州市について、大陸

との交易を活発に進めてきた自然環境の要因にもふれながら、製鉄所やI C工場だけでなく、近年では自動車工場や電気機械工場の進出が続いてきている姿を確認できる。

p.172~173では、全国の地方の中でも最も生産額が多い九州地方の農業について、その自然環境に即した促成栽培やシラス台地での畜産が取り上げられる。ここでは、そもそもは必ずしも農業に適していない土地においても、効果的な開拓やブランド化などによる様々な工夫で自然環境と共生してきた農業の様子を追究することができる。

p.174~175では、沖縄の自然環境のもとでの人々の暮らしについて、歴史的な経緯とともに、災害に備えたくらしの工夫や独特の自然環境を生かした産業に関する学習が進められるように、土地利用の地図や新旧の住居の写真などが効果的に配置されている。

以上のような学習を通して、学習のまとめのページでは、九州地方の地域的特色についての整理を特色の関連図を作成しながら、子どもたちが作成した関連図や、ここまでの学習内容を振り返りながら、「自然環境の視点からみると九州地方はどのような地域といえるか」について、自分なりの言葉で総括できるような学習活動を想定している。

新たな地理学習では、自然環境の視点を中心にとすると、いわゆる自然環境決定論的な見方に陥る可能性もありうる。その点、帝国書院の新しい地理教科書は、豊かな一方で厳しさもある自然環境と「共生」しながら生活を高めようとしている人々の営みに焦点をあてた構成となっている。この新教科書に即すると、九州地方の地理的な姿の本質を多面的・多角的に学習できる授業構成が可能となり、それは新しい社会科学習のモデルとなりうる。



「社会科 中学生の地理」 p.172~173



「社会科 中学生の地理」 p.174~175



「社会科 中学生の地理」 p.176~177